

## 博士論文審査結果報告書

報告番号	医博甲第2216号
学籍番号	0627022020
氏名	名取 初美

## 論文審査員

主査(職名) 田淵 紀子 (教授)

副査(職名) 島田 啓子 (教授)

副査(職名) 中谷 壽男 (教授)



**論文題名** Comparison of changes in the pelvis and pelvic floor muscle function between normal pregnant women and pregnant women with cervical incompetence

**論文審査結果**

## 【論文内容の要旨】

本研究は臨床での子宮頸管無力症の予防に、骨盤底筋訓練が関与している可能性から、そのエビデンスを求めようとして開始されたものである。正常妊娠や子宮頸管無力症と骨盤・骨盤底筋との関連がほとんど研究されていないことから、正常妊婦と子宮頸管無力症妊婦の骨盤と骨盤底筋の妊娠中の変化を明らかにすることを研究目的とした。対象は正常妊婦 14 人、子宮頸管無力症妊婦 10 人である。方法は骨盤測定、骨盤底筋機能の測定、会陰腱中心の測定を妊娠 16-19 週 (1 期)、24-27 週 (2 期)、30-33 週 (3 期)、36 週以降 (4 期) の 4 回縦断的に実施した。骨盤底筋機能は、圧力分布測定システムによって膣や直腸を収縮させたときの左右坐骨結節の減圧率によって評価した。結果、骨盤計測では正常妊婦と子宮頸管無力症妊婦では稜間径・棘間径・大転子間径とも 1 期を基準とした 4 期の相対値は 1.01~1.02 と同様な拡がりを示し、妊娠経過の異常の有無に関係なく変化することが示唆された。一方、左右坐骨結節の減圧率は、2 期に正常妊婦 31.8%、子宮頸管無力症妊婦 19.2% で両者間で差がみられた ( $P < 0.05$ )。また、正常妊婦において妊娠経過に伴う会陰腱中心の長さに差がみられた ( $P < 0.05$ )。子宮頸管無力症妊婦では妊娠経過による差はなかったが、1 期から 3 期で会陰腱中心の長さが正常妊婦より長かった。さらに、4 期の骨盤底筋機能と会陰腱中心の値が両者において同程度になっていた。以上の結果より、子宮頸管無力症妊婦の骨盤底筋は正常妊婦に比べ妊娠初期から弛緩しているものの、妊娠後期には正常妊婦と同様の弛緩状態になる可能性が示唆された。

## 【審査結果の要旨】

本論文は、子宮頸管無力症と骨盤底筋・骨盤の変化との関連を探索するための基礎的データを提示することができた研究であった。今日までほとんど研究されてこなかった骨盤底筋と妊娠との関係に着目し、その機能評価方法として会陰腱中心の測定および骨盤底筋収縮時の圧変化を用いた点にオリジナリティがある。本研究の成果は、今後、骨盤底筋の測定と妊娠中の標準値、早産を予期できる指標の開発、子宮頸管無力症予防のための骨盤底筋訓練の有効性を検証する研究等への発展が期待される。以上より、博士 (保健学) の学位を授与するに値すると評価する。